

曆

第二号

平成二十年十一月発行

醍醐志万子

桜の枯枝

死ぬること羨しと思えど早過ぎし船本碧三十八歳の死

病人の思いを今にして知る清しとばかり言いてもおられず

城跡にひろいし桜の枯枝をこれこそ桜とひろいて手にす

腰まがり歌いし人あり腰曲げることはあらねどあるけぬ不

幸

道ばたのこれはイヌタデ　トラックを下り来し男二つくし

やみす

戦争をはじめしことを耳廢の祖父に告げおり昂ぶれるわれが

昨日よりの曇くもりの空はどこよりか晴れてなにとはなしに秋の
空なり

駅への道おなじ時間に行く人をわれは覚えぬリュック負う人
も

だんだんうつくしくなると光太郎言いしかかるよわいのまば
ゆくも過ぐ

ねこじやらし数本加えし瓶を置きわが眼いくたびもその方を
見る

こぶし散るまたしても散る午後よりは日ぐせのくもり空おお
いて

みいちゃんのうちのひとりが大津より来るとう聞けば四月待
たるる

ユーカーリ歯科医院

引越して来たマンシヨンの真下に歯科医院があった。真下といっても見えているのは歯医者さんの裏側で、玄関へ行くにはかなりまわって行かねばならない。

ところで、こういうところへはヘルパーさんは規則上、中へは入れない。玄関まで来て待ってもらうことになる。それで最初のときは弟のオクサンが送ってくれたが、私は途中で倒れてしまったのだった。次からは弟、弟のオクサンが送り迎えることになった。

突然、一冊の歌集が送られてきた。開けてみると、著者はこの歯医者さんの父上で、フィクシヨンの歌集であった。

「オイオイ、昔、オマエのいたマンシヨンの部屋に歌人が入っているよ、と言ったら、息子からもう診ましたという返事が返ってきた」とのことだった。二階の端の部屋だと赤ん坊を連れて逃げるのに早いという計算があつて、この部屋を選ばれた由、云々。

父上が歌集を出版された理由は同郷、同級の歌人である短歌新聞社の石黒社長のすすめではなかったかと思う。歯科医の父上と石黒社長の郷里は同じ新潟である。

この前、父上の歌が「短歌現代」に出た。歯科医の先生の母上も歯医者さんだった由。その母上が認知症で入院されていた。そういう知的な仕事をする人が、と思うが、それとこれとは別のことらしい。歯科の先生の「母親がボケて」と話されるのを聞いたことがあった。父上は作歌の技術力はお持ちだから、フィクシオンではないこれらの歌はさすがによかったが、作品評には採り上げられなかった。そのお母さんというか奥さんがなくなれば、「短歌現代」にその追悼歌が掲載された。

マンシヨンに帰っているとき思い切つて歯科医院へ行くことにした。私にとっては大変な難儀であった。歯科医院の床の上を這って行って床から先生を見上げると、髪の毛も大分白くなっていた。

赤つめ草

体調をなべて数値に置きかえて九五よろし七〇よりも

呼吸数体温数字に統べらるるあけくれにして数学ぎらい

懐中時計動かぬものを仕舞い置く父の持ちものと言うだけ
のこと

引越しの荷物そのままみちのくの土のひいなをわが眼に描
く

牡丹の花大きく咲きてしとすと雨降る中に花びらぬらす

捨てて来し皿がにわかにな欲しくなる鯖寿司の上に生姜のせ
れば

順ありて咲ける桜の今ごろは牡丹桜か病院の裏

空を見て木を見てまたも木を見上ぐみどりとべにと芽立ち
の季節

佛には赤つめ草をたてまつれ車椅子よりわが手さしのぶ

森の木を追われ庭木に来て啼けるうぐいすなれど声にとき
めく

柿の木をおおう若葉と見てあれば柿の木肌に手はふれしご
と

のどあめに口をうるおしねむらんか甘露とうよろしき言葉

デッサンノートより





二〇〇八年四月、佐倉城址公園の桜まつりに出かける。広い城内を車椅子で回り、途中、アイスクリームを買い求めたりした。

あとがき

○ 遠藤さんから、お茶セットをいただいた。コーヒー、お茶などがあるが、われわれの年輩は日本茶を好む。

日本茶もなかなか好みもあるが、それは問わない。

何年前、ブームになった小説があった。ブームという言葉は、この場合、ふさわしくない。老婆が出がらしのお茶をおいしそうにすすっている。幸せとは、そういう人のことなのだろう。けっして卑しくはない。

○ 窓ガラスの向こうに、たくさん蛙だと思うのがへばり着いている。それが、いつの間にか居なくなる。灯にくる虫を待って、来なくなったら、どこかへ行く。
まさに芸術家！

発行所

(住所・電話番号 削除)

醍醐 聰